

古代ギリシアにみる人間観

上 憲 治

A View of Man in Ancient Greece

Kenji Kami

今日の我々にとっての人間は近代的人間観によっており、個人的で、理性的な存在であり、一方では生物的、物理的な存在でもある。しかし古代ギリシアでは未だそうした認識はみられない。ソフィストにおいて代弁されるアナーキーな個人主義社会でソクラテスは個人としての普遍的なあり方を追求し、訴えた。しかしそれは決して近代的なものではなかった。ここで我々の考え方を優とし、古代ギリシアのそれを劣るものとしているわけではない。むしろ我々には遠く理解し難いものとなっている古代ギリシアの人間観を多少なりともイメージできることを期待し、我々の時代とは違う生き方を知りたいと思う。

古代ギリシアの人間観として私が最初に思うのはソクラテスの「死すべき」「無知なる者」である。この考え方はギリシア神話とは矛盾しないものである。ソクラテスはその無知の自覚によってダイモンに帰依し、アテネの青年達にもそれを自覚せしめるべく活躍するが、それはダイモンへの献身であった。そのために彼は国家から処刑されるにも関わらずであったからである。そこにはソクラテスの人間理解、神観等があるのである。こうしたソクラテスを意識しながら、彼もその生き方を依っていた、ギリシア神話にその人間観を探ってみたいと思う。

1

そこでの人間の起源はプロメテウス神話にみる

ことができる。しかしギリシア神話には人類の起源についての定説があるわけではない。B.C. 6 C. アイソポスによる古代ギリシア人の寓話集成イソップ物語では人類はゼウスによって作られたともプロメテウスが作ったともでている。^{*1}

また、ヘシオドスでは人類は自ら存在していたようで、パンドラという女を人類に災いをなすために作って、与えたとだけでている。^{*2} ピンダロスは「人間と神とは同族である。我々は命の息吹を同一の母に負っている」とのべている。一番古いと思われる考え方は人類が自然に大地から生じたものだということである。^{*3} ヘシオドスは「仕事と日々」の中で五種族説を記している。五種族とは黄金の種族、銀の種族、青銅の種族、英雄の種族、鉄の種族である。

(1) 先ず黄金の種族は、クロノスの時世のころ神々によって作られた。「彼らは神々のように、愁いを知らぬ心を保って、労苦や嘆きも知らずに暮らしていた。そして惨めな老いに襲われもせず、あらゆる災いから遠く離れて、華やかな宴の中に、いつも手足も変わらずにいて、死ぬ時はちょうど眠りにつくごとくであった。」死後は地上にあって守護霊として人間たちをまもるのである。そして人々は神々といっしょに食事をし、理解しあった。

(2) 次は銀の種族であるが、黄金の種族に比べるとずっと劣り、姿も心も全く違っていた。彼らは百年間も子供のままで、青年になるとまもなく死んでしまった。彼らは互いに害しあい、不死の

神々に仕えようともせず、崇めようもしない。
 このころには主権はゼウスにあり、ゼウスは怒ってこの種族を埋め隠してしまった。

(3) 第三番目は青銅の種族である。それはとねりこの木から出たもので、恐ろしく強剛であった。彼らは戦いによって滅んでしまった。とねりこの木は槍の柄に用いられ、アルゴスやテバイでは最初の人間はこの木の精の血をひいている。それは戦士機能にかかわり、耕作して畠にまいた龍(怪物)の歯から生えて出た戦士である。彼らは互いに殺し合って滅びる。非道にふけり、かたくなな心気を変えなかった。この種族のときゼウスは洪水によって人類を滅ぼそうとした。^{*4} このときただ一組生き残るのがプロメテウスの子のデウカリオンとその妻の、エピメテウスとパンドラの娘、ピュラーであった。箱船伝説である。

(4) 第四の種族は英雄の種族である。ヘラクレスを代表とする英雄達は青銅の種族と同様に戦士であり、戦争に没頭し、戦争で死ぬ。しかし彼らのうちのあるものは特権を授けられて神となったように、青銅の種族とは逆で、節度、秩序、敬神を持っていたのである。そこには傲慢さはなく、正義が守られていたのである。

(5) 五番目は我々の時代である鉄の種族である。病気と老衰と死。明日についての無知と未来についての不安。労働。パンドラ(女)の存在。この我々の種族の生活は曖昧でかつ両義的である。というのは善と悪とが単に混じり合っているだけでなく、互いに堅く結ばれ解き難くなっているからである。パンドラはまさしく、この善悪二要素の混じり合った象徴でありかつその表現であるように思われる。それは「美しくかつ悪きもの」、「耐え難くまた不可欠な存在」であるからだ。またこの種族は生まれながらにこめかみに白髪を交えるようになったらゼウスによって滅ぼされると予言されている。

以上の五種族についてのヴァルナンの構造的分

析を整理してみよう。^{*6}

	支配的 価値	死 後	人間の 尊 敬	年齢的特徴
黄 金	正 義 (ディケ)	地 上 の 護	王の如 し	永遠の若者 労苦病老衰 死無し
銀	倣 慢 (ヒュプ リアス)	地 下 の 護	王の如 し 低 い	幼稚と未熟
青 銅	倣 慢	無 名	な し	青年期のみ
英 雄	正 義	無 名	な し	青年期のみ
鉄	正 義 倣 慢	無 名	な し	老年、白毛 頭の幼児

ここにおける人間の最も問題なのは傲慢である。これは始めにみたソクラテスの主張に符合するものである。

2

次に、プロメテウス神話によって見てみよう。銀の種族のときにゼウスに支配権が移り、彼は人間にたいして主権を主張するようになった。ここに人間の見方になって出て来るのがプロメテウスである。彼はゼウスによって滅ぼされたタイターンの一族であった。中立していたがゼウスが有利となるのを見てゼウスに見方し、受け入れられてオリンポスの神々に加わったものである。

(1) 人間と神々とが祭儀のことで争ったときどういうふうに犠牲を奉るかが問題になった。プロメテウスはその役をかって出て、大きな牛をほうると、骨の上においしそうに脂肪の部分をかぶせたものと、おいしい肉の上に牛の皮をかぶせたものとに分けた。これをみてゼウスはおいしそうな脂肪のほうを自分のものとした。しかし脂肪をいだら骨だけであったから大変怒り、人類から火を取り上げてしまった。

(2) しかしまたしてもプロメテウスはゼウスの

目を盗んで天上の火を大ういきょうの莖の中に入れて持ってきて人間に与えてしまった。

(3) この他にもプロメテウスが人類に施した恩恵は沢山ある。家を建てること、気候の観測、数、文字、船と航海等々、人類に文化をもたらしたのである。

(4) これに対してゼウスもまたその責めを要求した。先ず人類に対しては、パンドラをよこしてきた。それは1-(5)でみたように大いに災いであった。とりわけ彼女が神々からの土産として持ってきた瓶からは、人類にとってのあらゆる災難が出てきた。

(5) 次にプロメテウスに対する処罰である。カウカソス山の峰に結わえ付けられ、鷲がその不死の肝臓を食らう。一夜にして再生し、毎日のこの責め苦が三万年続いたといわれる。

(6) しかし人間の側ではますます正義が失われ、とうとう青銅の種族のときに人類を滅ぼそうと決心した。1-(3)参照。

以上のプロメテウス神話の示しているところはなんであろうか。それは不正義に対する厳しい処罰でもあるし、一方では人間の側からの無知で、無謀な神への挑戦とそうした行為への戒めでもある。

3

次にホメーロスにおいて見てみたい。ホメーロスの英雄の世界は、トロイ戦争をめぐって、神々と英雄達とが入り乱れて戦う一連の戦争物語の中に展開される。その成立は大体B.C. 800頃といわれている。^{*6} この世界は1-(4)表によって示されたように、黄金の種族の時代に次ぐ正義(ディケ)が中心となった時代である。英雄達は神々の子孫であったりするが、しかしやはり死すべきものであることには変わりはない。

英雄の社会はホメーロスの時代では理想社会で

あった。ここでは武人はアガトスであることが理想であった。アガトスは他のことはなく、ただ強いということであり、これがそこなわれることを最もきらったのである。彼らはこのためには死をも恐れない。まず名誉を重んじたのである。これは死を知らない神々にはない状況である。それ故に英雄達の死をかけて戦う姿は神々に愛でられるのである。

イーリアスに見られるように神々は人間に様々な働きかけをする。アポローン神はヘクトールを助けて戦っていたが、ヘクトールにそのモイラ(運命)が死をもたらす時に至ったらいっさい手を引き、彼は死に至るとかアポローン神の投げた円盤がゼピュロス(西風神)の嫉妬によって向きをかえられて、双方共に愛する少年ヒュアキントスの額に当たって死んでしまった、という具合にである。それで英雄達は戦場での勝負の結果にはこだわらない。名誉には結び付けない。激しい我を忘れた怒りや、突然の恐怖は彼以外のものの力によるのである。それは彼自信のせいではないのである。そうした行為は「アーテ(ate)」とよばれる。こうしてホメーロスでは人間は全ての運命(モイラ)が神から授けられてしまうことになっており、それに抗することは出来ないのである。神々もまた、モイラは、彼らには見えてはいるが、変えることは許されていないのである。このモイラとは死と悲運のダイモンであって、「神々と人間の秩序侵犯をあくまで追求し、違反者にその当然の報いを与えるまで休むことがない。」^{*7}

この死というモイラに対するものは神々の生の力である。神々の生かそうという働きはモイラによる死の間際まで生を守ろうとするのである。神々は生命の諸々の活発な喜びを与える。しかしそれはモイラの停止の時迄である。

こうして人間はその感情から行為、知覚、勇気、欲望等々は何か他からの働きかけによって生じるのであって、「これはホメーロスの人間が、全体の

個の人格というよりは、その多くの部分から形成されていると考えていたらしいこととよく一致する。]*⁸ 身体もまた幾何学的文様土器の人間の書き方からして、部分部分の組合せと考えられる。

ここに窺える人間観は神々とモイラ（運命）の絶対的影響力の範囲で揺れている人間である。

4

ところでこうした部分の寄せ集まりとしての人間観はイオニア学派の考え方にも窺える。古期イオニア学派のアナクシマンドロスは人間の認識には捉えられないけれども自然の源である無限なるもの（apeiron）があり、それから可感覚的な四元素（熱、冷、湿、乾）が自己分離して出たといっている。これら四元素が諸物や諸運動、諸現象を顕現せしめているのである。これは近代的個の観念とはまるで違っている。アリストテレス的な先のものとしての個物とも違う。ここでは近代的個は元素から一時的に現象せしめられた刹那的のものでしかないように思われる。そして個はこのアペイロンと四元素によってその現象活動を決定されてしまっているのである。同様な例としてアナクサゴラスの種子論もあげられる。

このように人間は、何か普遍的に確固としてその位置を存在せしめているようなものではなく、肉体的にも精神的にも諸々のものの寄せ集まりでしかない、頼りないものでしかないとみられているのである。

しかしこうした人間にも永遠と関わり会うことができるチャンスが残されている。「認識そのもの

は、ホメーロス的世界観に依れば、神々のわざである。よい想念が人間の意識に入り込んだ瞬間、神が彼に出会う。そしてよい想念とは、その神が彼に語りかけた言葉である。]*⁹ここで我々はソクラテスの知識主義を思い出す。「徳は知なり」という、知恵によって人が人として憂れたる者となり得る道は、無知の知によって示されるごとく、死すべき身であることを知り、ヒュブリアス（傲慢）を離れ、ディケ（正義）にいきる道、神への奉仕の道であるということになる。

しかし最後に残る疑問は、死すべき人間がかく関わる、永遠で知る神々とは一体何であろうかという点である。というのはこの神々というのは人間を左右し、人間を成立せしめていると考えられているからである。

注

- * 1 「ギリシア神話」 吳 茂一、新潮社、P. 32
- * 2 「ギリシア神話」 F・ギラン、青士社、P. 34
- * 3 「仕事と日々」
- * 4 前掲、 吳 茂一、 P. 40
- * 5 「ホメーロスの英雄叙事詩」 高津春繁、岩波親書、 P. 106
- * 6 「ヘシオドスの種族神話」 J・ヴァルナン、青士社、現代思想 1973 - 8
- * 7 「運命」 F・オットー、青士社、現代思想 1973 - 8
- * 8 前掲、 高津春繁、 P. 202
- * 9 前掲、 F・オットー、 P. 96